

【現場レポート】

災害時における動物医療 ～ 3・11 からの3カ月間を振り返る～

島村麻子

アニコム ホールディングス

3月13日読売新聞朝刊に、白い猫を抱いて一夜を過ごした女性の姿が掲載されていた。それを目にしたとき、「動物救援は、人生救援だ」と、自分のなかで何かのスイッチが入った。人命救助の次に、飼い主の心の支援。人命救助が最優先である緊急事態だからこそ、動物救援は私たちの役割（＝割り当てられた役）だ。そう思った。

そして、忘れもしない3月28日。大震災発生後、初めて東北の地に足を踏み入れた。その後すでに12回、週に1回以上の割合で東北と東京を行き来してきた。「動物救援を通じて、飼い主さんの笑顔を少しでも取り戻す」をテーマに、言葉を失う光景と不安と戸惑いのなか、無我夢中で活動してきた。まだまだ終息にはほど遠い。けれど、ここで一度、災害時における動物医療について、支援者への報告を兼ねて振り返ってみようと思う。

1 つめの気づき

報せがないのは、「悪い」報せ No news means the damage is serious

災害救助のノウハウのない私が、現地に行ってもかえって足手まといになる。私でも、何かできることはないか？ 現地のニーズを聞きたいが、電話も現地の負担になりうる。そんななか、仙台市獣医師会から日本獣医

師会に入った医薬品の「要請」は、内容も届け先も明確だった。その情報を基に、たくさんの支援者の手により、なんとか医薬品と車とガソリンを手配し、緊急車両指定をいただき仙台に向かった（図1）。



図2 津波による停電で信号も機能していない



図1 “モノ”を運ぶのは口で言うほど簡単ではない

宮城に入って1つ目の気づきは、東京で得られていた情報量と被害の程度は、反比例するという事だった。考えてみれば当たり前のことであるが、緊急時、被害が深刻であればあるほど「要請」を出す余裕はない。仙台市も津波の被害を受けていたが、同じ沿岸部の石巻市では、より広範囲に生活圏

へ被害が広がっていた。そして、電話等の連絡手段も途絶えていた。

緊急時には、報せがないのは悪い報せだと認識した。被災者と支援者をつなぐ現地コーディネーターが必要だ。被害状況と地元の活動状況を把握できれば、行政区分だけでなく、被害区分に応じて地元への適切な支援ができる

ようになる。また、初動で活躍できる災害救助のトレーニングを受けた者が動物医療においても必要だろう。ヒトの医療で言うところの「DMAT（災害医療支援チーム）」を至急用意しておきたい。

2 つめの気づき

予防医療は、動物が苦手な方への配慮 Preventive care for “non-animal people”

災害時には、動物医療ニーズが高まる。そもそも、災害で人と動物との絆がより強くなっているからだ。震災をきっかけに、「自分は、こんなにこの子が大事だったんだ」と気づく人もいる。命の次に大事なものを強制的に問われたとき、家族として動物を選んだ人は多い。そして、たくさんの悲しみや絶望感のなか、さらに動物が心の支えになっていく。そんな大きな存在である動物の具合が悪くなるものなら、飼い主の心配は増大する。そういった意味で、通常より動物医療へのニーズがベースアップしている。

もちろん、災害そのものによるケガや事故、衰弱等もあつたはずだ。災害医療ということでそれをイメージして現地入りしたが、私が現地入りできた震災発生の2週間後には、ほとんど災害そのものによるケガ等はみられなかった。よく目にしたのは、ストレスによるものと思われる下痢や体重減少、尿石症、子宮蓄膿症等だ。そして、病院に行けなかったことによって、既往症が悪化している様子もみられた。皮膚病、心臓病等、いわゆる慢性疾患が多く、てんかんの薬を必要としているケースも散見された。

また、季節要因および地理的要因も大きく影響するが、熱中症、外部・内部寄生虫症、感染症の対策の重要性が増していた。通常、予防医療は、飼い

主の自己責任の範囲であり、飼い主の意識レベルに左右されるものでもあるが、緊急時にはそうも言っていられない。逆に、動物の重要性を再認識しているいまこそ、予防啓発のチャンスでもあり、義援金の使い道として動物の予防医療への支援をどうか認めていただきたい。ここで、予防医療の徹底によって動物が苦手な方への配慮ができれば、今後、動物と一緒に暮らすことの社会認知がますます進むだろう。被

災地でいま起こっていることは、被災地でない地域の将来に大きく関わっている。健康で、人見知りもしない動物が、いままで動物に無関心だったヒトの心に明るい灯を灯すことだってある。避難所や仮設住宅で、人気者になっている動物もいる。こういう子が増えれば、災害時だけでなく、通常時の動物への理解も進む。そのためには、ズーノーシス対策はもちろん、できるかぎり健康体であることが望まれる。

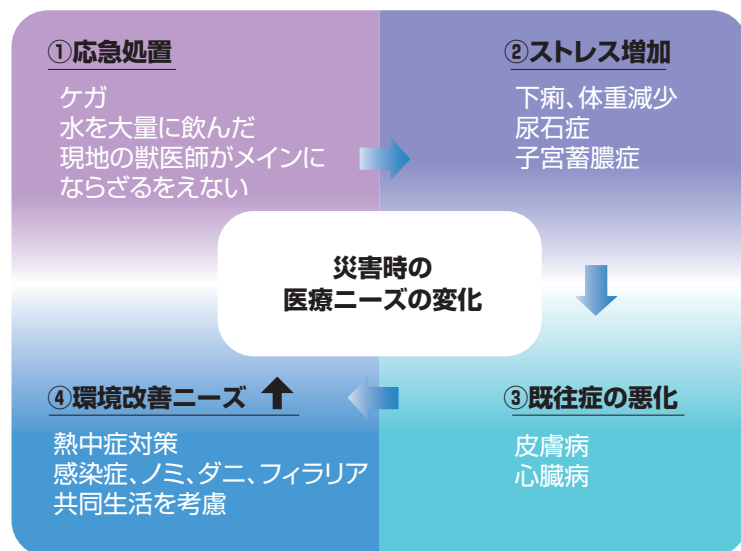


図3 災害時の動物医療ニーズの変化

3 つめの気づき

それでも地元の動物病院に行かない 3 つの理由 3 reasons for not going to local Animal Hospital

震災後すぐは、車もガソリンもなく、道路も寸断され、物理的にも動物病院に行くことができない。そもそも動物病院も、機械が壊れ、電気や水道に不自由しており、通常の診療ができない（このたびの災害では、全損した動物病院もあった）。

それでも1カ月もすれば、自衛隊等のめざましい活躍によって、インフラはかなり復旧してくる。そんななか、避難所等を巡回していて、医療ニーズはあるのに動物病院に行かない現象があることに気がついた。理由は3つ考えられる。1つめは、そもそも動物病院に行く習慣がない。ここは、巡回しながら地道に啓発していくしかない。2つめは、ボランティア診療をしているから、有償診療を受けようと思わない。3つめは、診療費が払えないから。家をなくし、仕事をなくし、家計が厳しくなっているなか、気にはなっているけれど動物病院の診療費まで用意できない。なかなか口にされないけれど、そうであることは容易に想像がついた。こうした状況のなか、ボランティア診療も重要だが、中長期で地元の復興を考えたならば、なんとか、地元の動物病院に足を運んでいただき、そこで受けた医療に対しての報酬を義援金で肩代わりする仕組みをつくりたいと思った。

被災者のペットの医療費助成

そこで、日本獣医師会や保険のプロにも相談しながら、医療費助成の仕組みを提案し、岩手県獣医師会、宮城県獣医師会、仙台市獣医師会、福島県獣医師会にて、実施するに至った。

この医療費助成の概要は以下のとおりだ。まず、無料健康相談を各動物病院で実施している旨を避難所等へ呼びかけ、来院を促し、そこでみつかった疾患に対する治療や必要な予防措置を



図4 緊急災害時における動物医療の三本柱

行う。その際、被災者には「被災者申立書」に記入してもらい、この申立書1枚当たり5,000円を、後日1カ月分まとめて各病院に振り込む。申請件数は、6月現在で4,000件を超えた。

広報が十分に行き届かない等の課題を抱えてはいるが、本制度を利用された飼い主からは、「話ができて安心した」「スタッフの方に勇気づけられた」「相談させてもらい、なんとかやっていけそうな気がしています」「動物にまで支援してもらえて本当にうれしい」「何かと出費がかさむので、本当に助かる」「がんばって、この子と一緒に生きていきます」等といった感謝の言葉が寄せられている。全国の想いのつまった義援金が、このように少しでも被災地の末端にまで届き、1頭でも多くの動物の健康が、多くの人の心を支え、地域の元気につながることを強く願っている。

さいごに

この3カ月間、「天災」と呼ぶべき自然の脅威は人間の力を遙かに超えるものだと痛感した。そして、残念なこと



図5 車のなかに避難している猫。熱中症が心配

に天災のあとには「人災」と呼べるような、もしかしたら、防げたかもしれない事柄が続発していた。しかし、どんなときも、人と人、そして、人と動物の間に、温かい支え合いがあった。その支え合いをこれから多くの人でもっと育て、現在、そして、次の天災後の人災を減らすべく、尽力していきたいと考えている。ひとはみんなのために、みんなはひとりのために。